

『いわしくんとあひる』

そのだひさこ

だいぶ前、旅先で偶然手にした『いわしくん』(菅原たくや・文化出版局)という絵本。日本の海で生まれたイワシが捕まり、買われ、焼かれ、食べられた。食べたばかりは学校へ行った。その日はプールだった。ぼくは泳いだ。ここまで一気に読み、何て何でもない絵本!と最後のページをめくって「やられた!」と心うたれ、その本を買った。最後のページは前ページと全く同じセリフ「ぼくは泳いだ」があった。そこには食べられないいわしくんがマグロのように堂々と泳いでいた。食べるとは、生きるとは、命あるものの「いのち」をいただくこと、「命の連鎖」というあまりにも自明のことが、各ページの一行ずつにシンプルに表現されていた。

最近、友人から『あひる』(石川

● 問い合わせ先 教育政策課 人権・同和教育担当

えりこ・株式会社くもん出版)という絵本をいただいた。鶏小屋で、一羽のオスと二羽のメスを飼っていて、毎朝鶏小屋に卵をとりに行くのが仕事の「わたし」。ある日、学校から帰るとじつと弟が鶏小屋をのぞきこんでいた。そこには一羽の「あひる」さんがやってきていた。やがて、あひるはお母さんの敷いたワラの中にじつとうずくまった。少し弱っているよう…。

翌日「わたし」は校門の前に待っていた弟と走って帰り、あひるが元気になるように二人でそっと抱き、川に泳がせに行った。お父さんのつくってくれた木の船を追っかけさせたり、川から上げたあひるに草をあげたり、あひるは少し元気になった。次の日も校門から転げるように走って帰り、鶏小屋をのぞくとあひるさんはいなかった。

その日の台所からは醤油とお砂糖の混じったいい匂いがいっぱい。その日はお肉と野菜の煮物が山盛

りのごちそうだった。お母さんの作ってくれた煮物はとてもおいしい。「あれ、あひるじゃないよね」と弟。「ちがうよ」と答えたお母さん。「あひるじゃなくてよかったね」と弟。「あひるじゃなければよかったのにな…」と思う「わたし」というモノクロの絵本。

小学校での講演に呼んでいただいたとき、「夕ご飯、何食べたかな?」「今日の朝ごはんは?」と問いかけてりする。みそは大豆さんの命、パンは小麦さんの命、空揚げは鶏さんの命、焼き肉は牛さんの命…いろんな植物や動物の命をいただいているよね!と。人間同士の命の尊厳など、地に落ち果てたかのような昨今。だが、その人間が生きていくためには、毎日人間以外のすべての「命」をいただいで生きているという恐ろしくも、大切な事実。そんな命の尊厳への呼びかけをいざなう教育・研修こそ!と今思う。

筑紫野市人権尊重のまちづくりスローガン

自分が人からされたり
言われたりして
いやなことは
自分は人にしない
言わない。

平成29年度筑紫野市総合教育会議にて、子どもにも大人にも理解でき、実践に移せるスローガンが決議されました。このスローガンの下、全市民に対して人権教育の推進を図り、心豊かな人権感覚の醸成に努めます。